大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和６年３月１９日
長崎市立西北小学校
文責：校長　江原芳樹
第１１号

「春がまっしろの欠伸（あくび）をする」と詠ったのは、日本近代詩の父と言われた萩原朔太郎です。春の光が、山々を、空を、くっきりと映し出しながら、その光の強さで全体を白く覆っているからでしょうか。

学校では、桜の開花の前に、１年生玄関近くの杏（あんず）が花を開きました。桜の花とよく似たその姿は、淡い桃色をしたため、春の光をいっぱいに受けています。また、朝から立哨をしていると、JR の線路沿いなど、木々の芽立ちに目を奪われます。柔らかく新鮮なその緑は、確かに生命の勢いが見えます。それは、どこか子どもたちの姿とも重なり、心躍る自分に気づきます。

少し足踏みをしていた春ですが、ようやく春の訪れです。春は、別れの春であり、出会いの春です。すべての出会いに感謝しながら、令和５年度のゴールを迎えたいと思います。

凛とした卒業式でした。

３月１８日（月）、第６４回卒業証書授与式を行いました。

今年は在校生代表として５年生も参加し、また多くの来賓を招いて卒業式を行うことができました。西北小学校を旅立つ卒業生の姿を地域の皆様に見ていただくことは、大きな意味があります。西北小学校を卒業しても、子どもたちは家庭で、地域で育っていくからです。また、今年は、卒業生と在校生が対面で「門出のことば」を行い、力強い声で言葉をかけあったり、合唱をしたりすることもできました。

卒業式での６年生の姿は立派でした。凛としたその姿には、確かな成長と未来への大きな可能性を感じました。まさに、「自慢のリーダーの姿」でした。

「立派になったね。これからのあなたの成長がとても楽しみです。」との想いで９３名に卒業証書を手渡しました。

式辞では、西北小のリーダーとして、活躍してくれた６年生に３つの期待することを伝えました。

１つは、「正しい心」で判断し行動すること。

１つは、「人の心の悲しみや痛みに寄り添う人であってほしい」ということ。

１つは、「自分を信じる人になってほしい」いうことです。

卒業は、次へのスタートでもあります。

西北小学校を旅立った 93 名が、それぞれに自分の道を切り拓き、より良い自分づくりをすすめていくことを心から願っています。

新しい学校歯科医になります。

学校だより９号で、特別功労賞を紹介した、学校歯科医の品川浩実先生（いながわ歯科医院）が、この度医院の方を転移されるということで、西北小学校学校歯科医を解任されました。長年にわたり、西北小学校の子どもたちの歯科衛生のために尽力いただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

品川先生の後任として、４月より、住吉歯科医院の和田 卓先生に学校歯科医をお願いすることになりました。

どうぞよろしくお願いいたします。

《校長散歩道 No.１１》

「子どもが良くなると思えば必ず良くなる、子どもが悪くなると思えば必ず悪くなる」

私が若いころ、師事していた先生から言われた言葉です。この言葉の意味を強く実感したのは教頭として赴任した学校でした。

その学校には、少しのことで感情が高ぶり、物を壊したり、周囲の人に暴力的になったりしていた男の子がいました。感情が高ぶらないようにと次第に周囲の者は距離を置くようになっていきました。

私が赴任した２年目に、新しい先生が担任となりました。この先生は感情が高ぶり変容するその男の子を「この学校で一番困っている子」と捉えました。自分の感情を調整できないのは、苦しく辛いことだと。何よりこの子が誰よりも良くなりたいと強い想いをもっていると言うのです。この先生は特別な手立てをしたわけではありませんが、こうした気持ちでこの男の子と接していきました。次第に激高しても回復する時間が短くなっていきました。感情が高ぶっても、自分で行動を制御できるようにもなりました。

中学生になったある日、男の子から担任だった先生に電話がありました。「もうイライラしなくなったよ。薬も飲まなくてよくなった。」と。

「子どもは必ず良くなる」と周囲の大人の見方が変わると、子どもは素直に伸びていくことができるのです。「子どもは必ず良くなる」と信じる大人でありたいと思います。